

# 再生現場を空間計画の立場から確認して (ベルマミーア地区)

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
 『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

## 1. ベルマミーア(アムステルダム)

1996年に訪れた時は団地の原型が見れた。広大な緑と、規則的に屈曲した長大な板状住棟で、緑の空間には親密性がまったくなく、このままではきっと問題になると感じた団地であるが、そのとおりに、相当な荒廃状態に陥った。移民の問題や場所の問題と言われているが、団地の空間構成にも大きな問題があったことは間違いのない事実である。

○総体として、長大高層住棟のみのエリアを、一部を残しながら沿道中層を加え、一部を壊しながら低層住宅群を加えるという方針には賛同できる。

○団地内に骨格道路を設け、沿道に中層の施設付住宅を配し、ピロティと介して既存住棟と連続させている考え方には賛同できる。これにより、大規模な団地から街への再生が目指され、それなりに成功している。

○街区内部に関して、車のアクセスを残された長大住棟沿いに配し、車も含めて一般住宅市街地の風景としている点は、このスケールからは賛同できる。

×しかし、そうになっていないところもあって、その部分は良くない。

△街区内部に残された長大住棟の足元2層程度を沿道アクセス型の住宅に改編している考え方は良い。

×しかし、住棟ごとに同じそろったデザインで、部分では良くても全体としては住棟のスケールが大きすぎ、空間の連続感が感じられないものが多い。足元部分には連続する中間のマスボリュームが必要である。

×低層住宅群の部分と、それ以外の部分の空間的、景観的連続性がなさすぎるのが残念。別世界の人が住んでいるかのように見えるところが多い。

×スケールの連続した中層棟が骨格道路沿いにしかないので、沿道景観の多様性は良いが、街区内部の風景としての多様性、ヒューマンスケール性、そういった親密感には欠ける。街区内部にも中層はないわけではないが、スケールとして均質で、輻輳したコラージュ的で多様な風景や親密な空間になっていないので効果が低い。(現在工事中の西地区で、少しそういった試みが見られる。)

×いろいろと工夫して良くなっているところもたくさんあるが、基本的に、広大に残された緑の空間は

大きすぎる。建物沿いに道路を入れるなら、この緑地部分に低層の住宅群を配する等、もっと小さくて親密な空間を内包すべきである。

×団地の周辺に出来ている戸建て感覚の連棟式住宅も、低層ながらスケールオーバーで、共有部分はあるものの、個人の領域性の表出は意識されていないうえ、出来上がった街路空間が広すぎて親密感に欠ける。総じて、きめ細かな個人を意識したデザインがほとんどない。旧埠頭跡地の再生計画に見られるようなアムステルダムの旧市街の持っている空間の親密さに対する意識が見られない。





関連リーフレット：003 004 030

『再生現場を空間計画の立場から確認して（ベルマミーア地区）』

発行：2012年3月

調査：江川直樹（関西大学教授）  
 執筆：江川直樹（ " ）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学  
 先端科学技術推進機構 地域再生センター  
 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号  
 先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室  
 Tel : 06-6368-1111（内線：6720）  
 URL : <http://ksdp.jimdo.com/>